

近世災害情報論

善光寺地震情報はどのように伝えられたか

An Analysis of the Circulation of
the Disaster Information of Zenkoji Earthquake (1847)

北原系子

①近世情報構造のなかの災害情報

②善光寺地震の災害記録

③災害情報の流布

まとめ

【論文要旨】

本稿は、災害情報を近世社会の情報構造のなかに位置づけるための基礎的作業の一環である。先に、災害によって発生した地変を書き留めた絵図を中心に、絵図情報の発信主体、受け手などによって、領主支配層、領内村落支配層、個人、かわら版などの出版業者の四カテゴリーに分け、災害絵図情報の社会的機能を分析した（『災害絵図研究試論』『国立歴史民俗博物館研究報告』81集、1999）。前稿におけるこの情報の四カテゴリーを踏まえ、本論では1840年代後半から50年代にかけて頻発する巨大災害の先駆けを成した善光寺地震の災害情報全般の分析をまず試み、各所に書留として残る資料の大半が被災地域の支配者から幕府に届けられる被害届で占められていることを検証した。また、被災地情報を正規のルートに載せ、広く販売しようとする地震摺物の出版には、それに関わる一群の地方支配層と都市における儒学者や国学者などの知的交流を踏まえたネットワークの存在が不可欠であったことが明らかになった。さらに、被災地を遠く離れた都市では、災害情報に限らず珍事、その他事件を伝える情報を積極的に入手し回覧し合う町人、武士などの身分的制約から解放された同好グループが存在し、彼らの間では善光寺地震の情報が個人的興味に基づく差異を含みながらも、大半が支配層間で交わされる被災届などで占められていたことを明らかにした。

善光寺地震、安政元年（1854）地震津波、安政二年（1855）江戸地震では、災害情報は量的にも質的にもピークに達するが、これに重なってペリー来航後の風説留が全国的に展開する。災害情報は、幕末に向かって高まる階層横断的な政治的関心の昂揚、拡大、それらを書き留める風説留の膨大な蓄積の先駆けを成したとすることができる。

①……………近世情報構造のなかの災害情報

(1) はじめに

近世社会における情報構造のなかで災害情報を取り出して論ずる意義はどこにあるのだろうか。

まず、ここでは災害情報を地震、噴火、津浪、洪水、竜巻などの自然の突発災害に限定して扱いたい。一般には、これに火事などを含む場合もあるが、当面对象から除いた。火事は近世社会、特に都市社会では日常的に発生していた災害であるが、放火など社会的要因がもたらす場合が多いからである。そして、また、近世社会において継起的に発生し、社会構造をも変えてしまうほどに深刻であった飢饉も対象から除いたのは、自然的要因が濃厚ではあるものの、突発的自然災害とは社会的対応が異なると考えたからである。ここでは、本論を前稿「災害絵図研究試論」の続編として位置づけ、対象を自然災害に限定することにした。上記論文で突発的自然災害時に描かれた災害絵図に対象を限定したことで、情報の発信主体についての分類がある程度可能であり、それによって、情報内容、方向性がそれぞれ異なることが検証できた。本稿では、先に発信主体の四つのカテゴリーとしたものにより普遍性を持たせるため単純化し、A：藩政史料、B：村落行政史料、(前掲拙稿では村落行政に携わる指導層による記録をBカテゴリーとしたが、ここでは村落行政史料に関わるものに限定し、個人的な記録はCのカテゴリーに入れた)、C：個人的体験記、見聞記、D：出版業者による災害情報の四カテゴリーとした。このうち、本稿では、C：個人が自己の見聞や体験を記録化し知人や自家の後裔にその体験から得た知恵を伝えようという目的を持つものと、D：作家など著述を生業とするものが利益の獲得を目指して一般の読者向けに作られた情報媒体を取り上げ、その情報の内容を分析することを通して災害情報流布の意味を考える。

さて、最近、以上の点に関連して研究動向を今後大きく左右するであろう重要な資料目録が刊行されつつあるので、まず、このことに言及し、併せて災害情報を取り上げる意味を述べておきたい。

東京大学史料編纂所画像解析センターにおいて、1998年以来『摺物総合編年目録』(稿)、1999年『風説留中画像資料一覧』、2000年『摺物総合編年目録』(第二稿)が相継いで出版され、従来かわら版と称されて来たものも含め摺物の所在が網羅的に明らかにされるという画期的な研究状況が創られつつある。ここでは資料群を大きく、摺物と風説留の二つに分け、それぞれについての定義付けがなされている。

それによれば、摺物は木版、銅板、石版などを含む印刷媒体を指し、それ以外の筆写して流布する情報を風説留としている。ただし、風説留の中に綴じ込まれた摺物の写などは、風説留中の画像として別目録に分類されている。なお、上記の目録では近世の出版規制を逃れて民間に流布した印刷物についてかわら版という語を採用せず、摺物という用語で印刷物をすべて包摂している。その理由として、かわら版という語は近世期の文献にみられなかったこと、また、新年、その他、祝賀の折などに配られた摺物とも内容的にみて重なり合うことが少ないと判断したと述べられている。⁽²⁾

また、上記資料目録を作成する中心的役割を担われている宮地正人氏は、風説留の分析の意義をご自身の研究関心との関連で、次のように指摘された。⁽³⁾

19世紀に入り、外国船の日本接近の情報は、幕府がこれを秘密扱いとしても民間各所で高い関

心をもって書き留められ、広く伝播した。このことが顕著になるのは、ペリー来航前後からであり、地方にあってこうした政治情報を真正面から受け止め、自らの利益の枠を超えて国益についても思考を巡らし、行動することのできる“国民”を形成する基層体験となったのではないかとされているのである。宮地氏に限らず、幕末情報論の中心的論題は、ペリー黒船来航一件をきっかけに、いまや全国至る所に蓄積されていることが明らかになりつつある政治的風説留の発掘と分析に向けられている。

本稿では、風説留の中心となる政治情報ではなく、災害情報を対象に取り上げる。その理由については、これまでの研究に基づいて、Dのカテゴリーに入る摺物を中心に、以下のように考えているからである。

- ① 災害情報は幕府権力による情報統制のなかで、民間での報道が比較的許容されていた領域であり、少なくとも18世紀中頃から、災害発生を伝える木版の1枚摺り、その他の摺物が販売され、民間において事件発生に即応してこれを伝える仕組みが発展した。
- ② これらの発行頻度は、幕末、少なくとも災害が多発した1850年代の半ばまでに相当な高まりを示し、そのことが自己の住む世界を超えた領域に関心を広げさせ、情報獲得への意欲や興味を沸き立たせる前提条件となった。
- ③ 災害の摺物情報—ここではかわら版と呼ぶことにする—はいわば表の情報であるが、従来摺物に印刷されることを憚る政治向きの情報を織り込んだ風説留の範疇に入れるべきものも、災害が多発する嘉永・安政期には表の情報として摺物となる傾向をみられる⁽⁴⁾。

要するに、上記幕末情報論との関連で本稿の目的とするところを述べれば、ペリー来航一件以降の風説入手の活発化状況は、これには重なって連続発生した大災害による情報氾濫が介在し、そのことが風説入手の活発化に一定の歴史的役割を担ったのではないかということである。しかし、また同時に災害情報が、政治的風説留とも異なる点についても行論のうちに明らかにしていきたい。

(2) 摺物のなかの災害かわら版の位置

さて、以上のことを検証するために、まず、上記の目録のうち、摺物目録中の自然災害の項にある摺物件数の発行頻度の推移をみてみよう。

表1は様々なところに残されている摺物の一覧であるから、同じものもそれぞれ1点としてカウントされている。当時流布した状況を捉えるという目的からすれば、同一のものもそれぞれ1点として扱うことに何ら問題はないと考える。

さて、表1に示された点数が集中するところは、まず、天明三年(1783)の浅間噴火、天保元年(1830)の京都地震、弘化四年(1847)の善光寺地震、嘉永三年(1850)洪水、嘉永六年(1853)小田原地震、安政元年(1854)六月の伊賀上野地震、同年十一月の東海、南海地震津浪、安政二年(1855)の江戸地震、安政三年(1856)八月の大風雨(表1、雷の項参照)、というところとなる。

このことから、次の二つの傾向を指摘することができる。

- ① 災害に関する摺物は大災害に集中する
- ② 災害摺物情報は18世紀の終わり、そして19世紀に入り、徐々に増加するが、1840年代の善光寺地震、1850年代の安政の両地震に至って増加傾向が顕著である

表1 東京大学史料編纂所編『摺物総合編年目録』にみる自然災害関係摺物の年代分布

年代	西暦	件数	地震	津浪	大風雨・洪水	雷	噴火	その他
天明3	1783	5					浅間	
天明6	1786	1			利根川			
寛正4	1792	1					島原	
文政11	1828	1	越後					
天保1	1830	4	京都					
天保5	1834	1			富士山出水			
弘化3	1846	3			利根川, 京都			
弘化4	1847	27	善光寺					
嘉永1	1848	1				江戸		
嘉永3	1850	12			備中・安芸・三州・尾州			米価高値(1)
嘉永5	1852	3			上野, 京都(2)			
嘉永6	1853	17	相模国(16), 甲州身延山(1)					
安政1	1854	132	伊賀上野(23)	安政東海, 南海(109)				
安政2	1855	214	江戸(212)		駿・遠・三河(2)			
安政3	1856	19				大坂(2), 江戸・近在(16), 他1		
安政6	1859	1			江戸			
慶応2	1866	1			京都			
江戸後期		2				江戸		
明治1	1868	2			大坂			
明治4	1871	1		大坂・神戸大津波				
明治14	1881	1						ノストラダムス予言
明治18	1885	7			大坂			
明治21	1888	2					磐梯山	
明治24	1891	3	濃尾					
明治26	1893	1			岡山			
明治27	1894	1						浅間噴火口図
明治期		1						地震用心・火の用心
大正12	1923	1	関東					
合計		465						

東京大学史料編纂所『摺物総合編年目録』のうち、同編纂所教授（現国立歴史民俗博物館館長）宮地正人氏に提供していただいた「自然災害」の項のデータに基づく分析である。

*（ ）内の数字は該当件数を表す。

そこで、次に問題とすべきことは、こうした傾向は、摺物にだけ認められる傾向なのだろうかという点である。善光寺地震の災害記録からその傾向性をまず捉えておくことにしたい。

②……………善光寺地震の災害記録

(1) 地震史料集にみられる災害記録の傾向性

善光寺地震の記録について現段階までの史料が収集されたものとして、『新収日本地震史料』第5巻別巻6-1、及び6-2をあげることができる。これは、戦前に武者金吉の編んだ『増訂大日本地

震史料』第3巻を踏まえて、戦後の地方史研究の進展により発掘された史料、あるいは藩政文書の新出史料の収集を目的として編まれたものである。『新収日本地震史料』の編集方針では、武者金吉がすでに収録したものについては史料名は表記するものの、史料自体は重複を避けて載せていない。したがって、本来は善光寺地震記録の全般的な状況を把握するためには上記二書の史料全体を拾う必要がある。しかし、ここでは、地震史料として現在多用されているものが、本論冒頭で示した災害絵図の分類項目に照らしてどのような構成からなるものなのかを概略把握するという限られた目的を持つに過ぎないので、『新収日本地震史料』の善光寺地震記録が収録された二巻（全1834頁）の史料の簡単なカテゴライズを行うことにした。

因みに善光寺地震史料を収録する『新収日本地震史料』第5巻別巻6の二冊にわたる内容は、その目次に従えば、I. 全般（1-818頁）、II. 長野県（819-1657頁）、III. 新潟県（1658-1804頁）、IV. その他（1805-1834頁）からなる。今回は、このうちのI. 全般とII. 長野県に収録されている史料を中心にみていくことにする。ここで、全般とは、藩政史料など、支配の側に残されているこの災害に関する記録であり、長野県とは、当該地域に残された災害記録を中心としている。しかし、実際の収録文書を見る限り、この基準は厳格なものではない。

なお、本史料集は一般に歴史学が「史料」と呼ぶ善光寺地震に関するものに限らず、地震に関する科学分析、近現代に至って編纂された市町村史の類からの記述も収録されている。これらについては、地震に関する被害届など当時の藩政史料、あるいは村落史料などがそのまま掲載されているものについては件数に数え入れたが、それらを活用して地震の状況や被害を叙述するもの場合は史料件数から除いた。そうした措置を行って得られた史料件数は、別巻6-1はAの藩政史料が86点、Bの村落行政史料が4点、Cの個人の日記、あるいは見聞記類が48点の計138点を数えることができる。なお、本巻の史料件数としては全体で160点にのぼる。ついで、別巻6-2はAが6点、Bが298点、Cが32点の336点であり、二巻を合わせた合計ではAが92点、Bが302点、Cが80点の計474点となる。別巻6-1と6-2において、Cの個人見聞録などが大差ない数値であるのに、Aの藩政史料とBの村落史料が逆転するほどの構成比の違いを示すのは、別巻6-1はこの地震の被害地域のうち、藩政史料がまとまって残された松代藩の藩政史料が多く収録された結果である。上田藩については若干の藩政史料が収録されているが、被害の軽重はあるにせよ、飯山藩、須坂藩、松本藩の藩政史料、あるいは天領の中野代官所、中之条代官所の代官所史料などは、殆ど残されていない。これらの地域は、村落に残された控などからその被害の実態を断片的に窺うことが出来るに過ぎない。すなわちBタイプの史料群である。こうした史料は地域史料として別巻6-2に収録された。その結果、上記のような構成となったのである。なお、史料集が編まれる目的がこれらの史料群から地学的あるいは理学的なレベルでの地震像を捉えることに置かれているため、被害の実像を伝えるものが主要なものであって、伝聞史料、それも同じような事柄が各地で重複して書き留められているものなどはほとんど省略されている場合が多い。見聞記類（Cタイプ）でも本史料集の目的に叶うものは収録されたが、D（かわら版、戯詞などの摺物）の類は極めてまれにしか載せられていない。以上のように、災害の客観的な記録を中心としたものであるため、見聞、伝聞を含む災害情報に関しては多彩な内容は認められない。しかし、被害地に残る災害記録の一般的な性格を反映したものと捉えられる。そこで、収録された記録の概要をまとめると、以下のようになる。

- ① A 藩政史料（寺領関係も含む）群；幕府あるいは上級機関（例えば、善光寺大勧進から松代藩など）への変災届・災害復旧資金の借用願、復旧のための普請に関する史料、また、領内被害状況、被害届、救済願、及びその措置に関する史料が中心をなす。他藩、他領の被害に関する情報収集活動を示す記録もある。
- ② B 村落史料；自村の被害届、救済願の控などが中心をなす。また、被災地の各領主、代官の幕府への被害届、すなわちAのカテゴリーに属する記録の転写が多く認められる。
- ③ C 見聞記類；被害地域になんらかの利害関係を持つ場合（金沢藩など被害地域の街道を利用する藩など）、飛脚問屋などによる各地域の被害についての情報収集活動は活発である。また、被害地域内にあっては、当該災害に関する伝聞史料の書留などは少ないが、被害が軽度であったり、あるいは被害地域から距離のある所では、伝聞史料の書留が増す傾向が認められる。
- ④ 本史料集の各所に、重複のため省略とする注記が多い。これは災害記録の筆写、転写が多かったことを示す証拠と考えられる。

上記③の同じ災害記録が残される場合であっても、被災地域における災害記録と被災外地域の記録では、記録の持つ意味が質的に全く異なることはいうまでもないことである。情報の発信源としての被災地域の記録が被災地外においてどのように流布したのかについては、3章において、被害を離れた江戸、名古屋の災害情報の記録を元に検討する。

(2) 被災地の災害情報——善光寺地震

上記史料には史料集の性質上、Dの分類に該当する摺物類—ここではかわら版と称することにす—るすなわち売買の対象となるような二次的災害情報の収録が少なかった。しかし、実際には、善光寺地震の際に出版されたかわら版はその歴史からみれば、相対的に少ない量とはいえない。したがって、上記の史料集から、善光寺地震の災害情報の構造全体が明らかになると言い切ることは極めて危険であるし、史実に反することになるだろう。

この点についてこれまで明らかになっていることは、善光寺地震に関するかわら版は地元発行のものが多いたことが特徴的だとされている。⁽⁷⁾近世出版史の観点からも、この地震を契機に地方出版が著しくなるといわれている。⁽⁸⁾確かに、現在確認できるものの2,3点には、中山道追分宿丸屋与六、北国街道稻荷山宿宮匠、また、中山道岩鼻宿で売り出されたと添え書きされているものなどもあり、⁽⁹⁾街道筋の宿場で盛んに売り出され、また購入されていたことは明確である。さらに、稻荷山宮匠はその名が暗示するように、宮大工職人であったというし、また、最近、北国街道の旧丹波島宿からは善光寺地震のかわら版の版木が発見されている。⁽¹⁰⁾恐らく、専門の出版業者というよりは、江戸や大坂のように出版専業では生業が成り立たない地域では、時に応じてさまざまな業をこなした人々が街道の宿場で人々の求めに応じて災害情報を盛り込んだかわら版を売り出したと考えられる。

次に紹介するのは、無許可出版のかわら版ではなく、正式な出版許可を得て出版された平昌言「信州地震大絵図」の販売記録である。私たちは、この史料から、出版には全く素人の地方の一知識階層が自己の収集した災害情報をもとに災害絵図を作製して広く販売していこうとした実態を知ることができる。幕府学問所に出版許可願いを出し、広く売り捌こうとしたのは、二枚組の善光寺

地震の災害絵図「弘化丁未春三月廿四日信州大地震山瀬川塞湛水之図」(以下「湛水之図」とする)、「弘化丁未夏四月十三日信州犀川崩激六郡漂蕩之図」(以下「漂蕩之図」とする)である。この図の作者は原昌言(はらまさこと・1820～1886、通称良平、上田藩上塩尻村)である。同家には多数の関連文書が遺され、それらのことから判明した事実についてはすでに報告済みである。今回ここで、報告する史料は、昌言の曾孫にあたられる原興氏からもたらされたこの災害絵図の販売記録「信図公布録」(図1)である。どこに、いつ、何部販売したかなど重要な記事を書ける類をみない記録である。この図が現在でも広範囲に残されている理由の一端を説明するものと思われるところから、ここでその内容を紹介することにしたい。⁽¹²⁾

(3) 災害絵図「湛水之図」、「漂蕩之図」の出版事情

まず、「湛水之図」(写真1)、「漂蕩之図」(写真2)の二枚組災害絵図についてすでに明らかになっている点を摘記しておく。

- ① 弘化四年(1847)三月二十四日に発生した地震災害「湛水之図」と、20日後に発生した犀川の決壊による洪水による二次災害「漂蕩之図」を二枚のセットで表現した。
- ② 説明文は、過去に同様な洪水を伴った大規模な歴史災害「仁和の洪水」(仁和三年七月三十日)を上げ、今回の災害と比較している。災害の被害記事は弘化四年十月末段階までを盛り込んでいる。
- ③ 本図は弘化四年八月、株仲間解散によって本屋仲間の統制が停止されていたため、当時出版許可業務を担っていた昌平坂幕府学問所に出版許可願いを出し、九月中許可を得た。出版許可に至るまでの推敲を重ねた原因図が数点ある。最終的には、災害情報だけに限定しない、神社仏閣の開帳、川中島古戦場などの観光情報を盛り込んだものとなっている。
- ④ 本図の異版は、出版元が江戸日本橋の書物問屋山城屋佐兵衛・善光寺大門町蔦屋伴五郎・上田海野町上野屋三郎助の相版になっているものや、前二者だけのもの、あるいは大坂の書物問屋秋田屋などが加わる版も確認される。それらは、原昌言の「俟命館」蔵版に基づいて出版された。

以上が、「湛水之図」、「漂蕩之図」の二枚組災害絵図の出版事情に関わって、これまで明らかになっている点である。

(4) 「湛水之図」、「漂蕩之図」の販売戦略

今回の新出史料「信図公布録」は、ほぼ三つの内容から成っている。まず、①本屋などへ売り渡した記録、2番目には、②この災害に関係する江戸の各藩邸・代官への売り込み、3番目には、③江戸での販売に従事した費用のメモである。以下概要を表にして示しておこう。

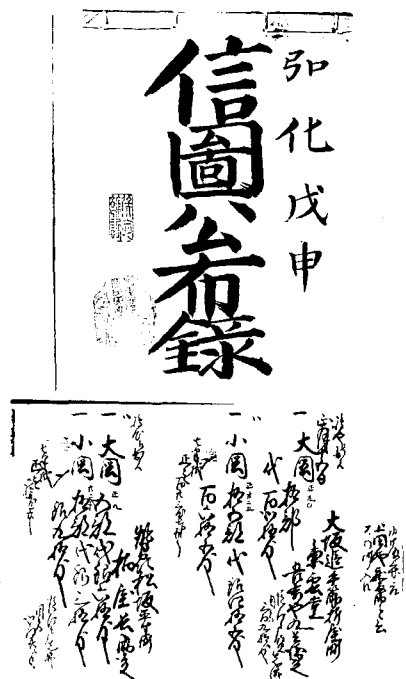


図1 「信図公布録」とその内容

1. 本屋への売り込み

以下のような形で、販売先が記録されたものが55件ある。ただし、販売部数や、送り先の住所などが明記されていないものも含まれる。

嶋やへ出す 正月十五日

一、大図 拾部 正 九〇 大坂追手筋折屋町

代 百弍拾匁

東雲堂 吾妻や九兵衛殿

一、小図 拾五部 正 廿二五

代 銀四拾五匁

一印 〆 百六拾五匁

七半掛 正ミ 百廿三匁七分五厘

これらを表にまとめると、表2のようになる。なお、表2中の販売先に件数の記入していないものは、すべて1件である。大図と小図があり、それぞれ正価は大図銀12匁、小図銀3匁であるが、本屋仲間などへの卸値はほぼ7割5分である。大図がなにを指し、小図がどれを示すのか、現段階では明らかではない。ここでは、大図は「湛水之図」、「漂蕩之図」の二枚組セットを指し、小図は、二枚組の情報を1枚にまとめたものとしておく。搬出日は、弘化五年（1848）正月九日～二十一日

表2 俣命館蔵版災害絵図・
販売先一覧

販売先	部数大小計	合計額(銀)
大坂	25	165
伊勢	15	90
名古屋2件	30	180
中山道宿2件	28	109
甲州	9	37.5
野州3件	39	162.5
江戸4件	36	
越後16件	121	
会津		
信州20件	186	
不明3件	8	
合 計	497	

* 代金

大図銀12匁 卸値0.75掛け

小図銀3匁 卸値0.75掛け

出典「信国公布録」

表3 俣命館蔵版災害絵図・
信州の販売先一覧

宛 所	名前	大図	小図	合計部数
松本本町	慶林堂	5	10	15
松本本町	青雲堂	3	5	8
松本中町	湊屋	3	5	8
松代町	美濃屋	5	10	15
須坂町	牧屋	5	10	15
中野町	伊賀屋	3	5	8
中野町	松岡屋	3	6	9
小布施町	高津	3	7	10
篠ノ井村	万屋	3	6	9
小布施町	高津	5	5	10
稲荷山	保柳	3		3
苅屋原	万屋	3	6	9
田沢湯本	和泉屋	3	10	13
浦野宿	大黒屋	3	5	8
別所大湯	山極	3	10	13
高井郡洪湯	菱屋	5	10	15
善光寺西町	吉野屋	1		1
矢代宿	笹屋	3	5	8
矢代宿上平	靴屋	1		1
中条町	桂屋	2	6	8
合 計	20件	65	121	186

出典「信国公布録」

に集中している。三月に1件あるのは、後からの注文であろう。この段階までで、約500部近い数を搬出していることがわかる。大坂、伊勢松阪、名古屋、江戸などへ手広く売り出していることがわかる。意外なのは、江戸へ売り込みが少ない点であるが、これについては後述する。これらの地方へは、京屋、嶋屋などの五街道の飛脚問屋を使うが、信州地域の店には松本藩御用飛脚、あるいは善光寺の町飛脚を使っている。中山道宿2件は、福島宿と追分宿である。ここへも相当の部数が送られている。また、野州2件も佐野天明宿と栃木宿である。宿場町での災害かわら版などの売り出しは比較的早いですが、この売り込み先の記録から宿場町においてもこうしたものが買い求められる市場が存在していたことを示している。越後への売りさばき件数も16件と多い。これは、善光寺での三月二十四日の本震後、三月二十九日に最大余震があり、高田地方では被害が出た。被害の激しかった震源地善光寺周辺への関心が寄せられた結果であろう。信州の各販売先を表3に示した。圧倒的に多いのは地元であるが、地元善光寺への売り出しが少ない。これは、版元として名前を刻す薦屋伴五郎が販路を掌握したのではないかと推定される。

2. 各藩への売り込み

地元への売り込み、大坂や名古屋などへの500部近い売り込みに比べると、各藩への売り込み部数は100部強と少ないが、この災害に関係する各藩への売り込みには相当の努力を払ったことをわかる。期間は弘化五年正月八日～二月八日までの1ヶ月である。その様子を表4に示した。松代藩を除くと、販売成績は必ずしもよくない。しかし、昌言が最初から主要な売り込み先として狙っていた一つがこうした災害に関連した各藩、代官などであったということが推測できる。以下に史料に見られる記載例を示しておく。

正月八日

一、大 一部 銀拾貳匁 青山善光寺御山内
一、小 一部 銀三匁 嶋 領 助 様

ノ

… (中略) …

同 十一日

一、大 一部 代拾匁 松本様 呉服橋内
御内 渡辺 作左衛門様
上方 喜 膳 様

ノ

表4 災害絵図・武家方販売先

販売先	部数	備 考
代官 11 件	6	武家向け値段 大図=10匁、 小図=3匁 但し、松代藩向け 値段は格安。
勘定 2 件	3	
普請役		
本丸医師	2	
書役 2 件	2	部数なしのもの多し、 数値は記入のあるもののみ計。
寺院 4 件	3	
加賀藩出入商入		
椎谷藩		
高田藩	2	
松本藩	1	
岩村田藩	2	
飯田藩 2 件	2	
小諸藩		
諏訪藩		
松本藩	1	
須坂藩	1	
松代藩	65	
山城屋	5	
不明 2 件	12	
合 計	107	

出典「信國公布録」

このような形で、40例が記載され、代金未納などに関する推定されるメモが貼紙に記されている。

例えば、「度々上り候へ共御他行、其内参り候よふ被仰置候」といった内容である。要するに、後でまた来るようにという伝言であったということである。これによって、何度も目的の藩邸に出かけ、用向きを伝えるべき用人に会う努力をした様子が推測できる。突然出かけても用人が会うはずもないから、松代藩など、しかるべき人を介しての売り込み作戦であったと思われる。この仕事を昌言自身が江戸に赴いて行なったか否かは不明である。災害の大規模な地変を絵図に表したことに昌言は相当の自信を秘めていたからこそ、こうした売り込みを熱心に行なったのであろう。

寺院売り込み先は江戸の4件である。青山善光寺はじめ浅草寺、谷中天王寺などである。大図銀10匁の売値は、武家・寺院ともほぼ一定しているが、青山善光寺のみ12匁である。理由は不明である。高木清左衛門、川上金吾助など自身の代官領が相当の被害を被った代官の江戸元締め屋敷にも売り込みにいっている。しかし、購入したかどうかは帳面上明らかでないものが多い。また、勘定所役人直江倉之助役宅へは、大図1部、小図1部を売ったようであるが、「御同人様御家来中」には小図の箇所に「内々式」とある。おそらくは、一部は家来に無料提供を強要されたのではないだろうか。藩邸への売り込みでもこうした例は見られる。

全般的に武家への売り込みは苦戦である。すでに紹介したように、いつかまた来い、朝早く来い、値段が安くなればあと3人は買うだろうなどといったメモが貼付されている。そのなかにあって、松代藩の場合は、正月二十一日から二月八日まで、計65部を購入している。ただし、ほかの藩よりは格安の8匁5分と7割強掛けの売値で届けている。表4の最後の方にある山城屋とは日本橋の書物問屋山城屋佐兵衛のことである。なぜ、商人などの売りさばきの部に載せず、ここにまとめられているのかは不明である。山城屋関係の版下職人がこの災害絵図の作製に関わった可能性も考えられる。つぎにその点を述べておこう。

3. 江戸での売りさばき

「信図公布録」の最後に、江戸に出て、この図の販売その他に関係したと推定される「工藤彦三郎子之分」として、4両余の出費内訳がある。大小二腰、四書正翰30冊、袴地、桐唐机、書簞筒、入学祝などに交じって、「山城屋墨場必携」16匁などと書き上げられている。この費用の書き出しがなにを意味するのか現在のところ明確には把握していない。この費目の消化者として、彦三(郎)、豊吉の2人の人物が登場する。原與氏によれば、彦三郎なる親戚はいたということである。しかし、これに続いて「久米印」として書き上げられた費用の内訳は、弘化四年十二月十日から翌五年二月一日まで、と二月三日までの江戸での2人分の宿泊費用である。場所は不明だが、「とらや」に計54日泊まった支払い額、1泊銀1人2匁で総計108匁(金にして1両3分と銀3匁)、他の1人分は53泊、銀106匁である。この2人は、彦三郎と豊吉と推定してよいとすれば、この2人は、山城屋へも出入りし、なんらかの形で、山城屋関係の版下職周辺の仕事に関わりつつ、絵図の作製、販売の戦略を伝授されたのではないかと推定される。その際、江戸での販売は山城屋が占める取り決めがあったのであろう。それが、昌言自身の販売路に江戸の書物問屋がわずかしき登場しない理由ではないかと思われる。善光寺町の版元蔦屋の場合もこれと同様、蔦屋の従来からの販売網を保証する取り決めであったため、昌言側はそれ以外の地域の売り込みを行なったのではない

かと推定される。

以上、善光寺地震に関する「湛水之図」、「漂蕩之図」の災害絵図セット図の販売戦略を限られた史料から推定した。この図は、災害直後出版されるかわら版類とは異なり、幕府の正式な出版許可を経た災害図である。現在残されている量も少なくない、当時としては人気の災害絵図であったと推定される。災害自体の大きさや二次災害の地変、善光寺開帳への各地からの参詣人の遭難などがこの災害への大きな関心をもたらした理由とはいえ、本図が推敲を重ねて丁寧に作られたものであったことも、人気のあった理由の一端であろう。それに加えて、これまで見てきたように、江戸、地元善光寺などの書物問屋の安定した販売網に載せられたことも大きかったに違いない。しかし、さらに、作者原昌言のこの災害絵図を売り込む意図が単なる販売利益の追求を超え、山体崩壊による川の堰き止め、その結果引き起こされた洪水などの大規模な地変、開帳中各地からの多数の参詣人を死傷させた変事の記念誌的発行という位置づけが大きく作用したと考えられる。

(5) 災害録の著者 その1 原昌言

なお、地方にあって、こうした絵図を作り、幕府の出版許可を得て江戸の大名藩邸に売り込もうとする積極性を持つ人物を、幕末のこうした時期に地方に排出する有用な人物群のなかに位置づける意味で、後日譚を紹介しておこう。地方において思想啓蒙活動に携わる一群の人々のネットワークが垣間見えてくるからである。

昌言は弘化四年（1847）に学問所から先の絵図の出版許可を得た経験を踏まえ、4年後の嘉永四年（1851）には上田城下の原町の商人にして文人であった成沢寛経（1796～1868、呉服太物商万屋金兵衛、通称七郎左衛門）⁽¹³⁾ 編纂になる「大塔物語」を出版にまで漕ぎ着けた。なお、成沢寛経は、国学の平田学の門人であり、昌言との繋がりにはこうした思想活動の連携が想定される。ここにいう「大塔物語」とは南北朝争乱における勤王方の旗頭となった護良親王（大塔宮）を描く南朝側の視点に立つ合戦記である。すでに原本が失われていたが、諏訪大社本で復刻を試み、この校閲を原昌言が担当した。この時、同時に昌平坂学問所へ「尚古図譜」と題する松平定信の「集古十種」に倣った古物の考証誌の出版許可を願い出ている。しかし、これは、未完成な部分もあったようであり、出版許可が下りていない。

これらの出版の経緯は、上田市博物館蔵成沢寛経文書によって明らかになる。⁽¹⁴⁾ この書簡では前記二書の出版のため、江戸で奔走する昌言の行動が、上田の寛経宛逐一報告されている。それらの書簡に散見される人物群から、出版に漕ぎ着けるためのネットワークが浮かび上がる。たとえば、「大塔物語」の序文、「尚古図譜」の内容などについて林家に意見を乞うている。また、上田藩から林家の学寮に入り、後に上田藩校設立のため尽力した加藤維藩⁽¹⁵⁾（1747～1854）、佐藤一斎、塙家などの他、先の災害絵図出版に際して仲介の役を担った栗原孫之進（林家人用）なども登場する。書物出版の記述を廻る論評あるいは出版実務などその関係性のレベルはさまざまであるが、こうした活動に志を共有する一群の人々のなかに昌言がいたことは明らかである。詳細は今後の調査研究をまつしかないが、単なる利益目当ての出版活動ではなく、郷里の歴史の見直しを企てる啓蒙活動の一環として位置づけることができるだろう。

③……………災害情報の流布

さて、次に被災地域から発信された災害情報が被災地域外でどのように受け止められたかを見ておくことにしたい。Cのカテゴリーに属する個人による記録の集積をみることで、これを検討する。対象とするのは、さまざまな情報集積の書として著名な『藤岡屋日記』、『青窓紀聞』、『鶏肋集』である。『藤岡屋日記』は江戸時代には珍しいプロの情報屋の手になる情報書留である。『青窓紀聞』、『鶏肋集』はともに名古屋尾張藩の下級藩士の手になる。『藤岡屋日記』は江戸における災害情報、『青窓紀聞』および『鶏肋集』は名古屋地域における災害の流布情報の書留として、相互に比較検討することも兼ねている。

(1)『藤岡屋日記』、『青窓紀聞』、『鶏肋集』の災害記録

表1で見たように、弘化四(1847)年善光寺地震、安政元年(1854)六月の伊賀上野地震、同年十一月の安政東海・南海地震、安政二年の江戸地震の摺物が集中している傾向は明確であった。江戸時代の著名な記録集では、どのように受け止められているのかを見ておこう。

江戸で古本屋を開きつつ、茶坊主などの下級幕吏から江戸城内の情報を買い集めたといわれる藤岡屋由蔵(1792～没年明治元年以降、不明)の『藤岡屋日記』⁽¹⁶⁾、尾張藩の城代、年寄を勤めた大道寺直寅の用人であった水野正信(1805～1869)の『青窓紀聞』⁽¹⁷⁾、同じく尾張藩右筆であった安井弥兵衛重遠(通称清太郎、清右衛門、生年不明～1862)⁽¹⁸⁾の『鶏肋集』で、災害記録がどのように扱われているのかを見、それらの情報内容を検討することにしたい。

まず、『藤岡屋日記』で、災害関係記事をまとめて1巻としてしているのは、第48巻の「諸国地震之記」と題する安政東海・南海地震記録と、別巻の「江戸大地震之事」上・下である。天保元年(1830)の京都地震、弘化四年の善光寺地震、嘉永六年(1853)の小田原地震は、それぞれ年月順の記事のなかにおさめられている。このうち、比較的記事の収録量が多いのは善光寺地震で、他の二つの地震については4,5件の記事しか収録されていない。このほか年次順のもの以外に別冊にまとめられているのは、「海防全書」と題されるペリー来航に関わる一連の記事5巻の収録である。したがって、『藤岡屋日記』の場合、災害記事が一括まとめられているものとしては、善光寺地震、安政東海・南海地震、江戸地震の三ケースといえる。もちろん、年月順の記事の中にも災害に関わる摺物や替歌なども1,2点が挿入されている場合もあるが、次々と発せられる情報をまとめて編集・収録したといえるものは、上記の三ケースとしてよいだろう。

『青窓紀聞』は、尾張藩陪臣水野正信によって収集された記録集成で、文化期から明治元年まで全205冊に及ぶ。この記録集の目録によれば、災害情報がまとめられているのは、第3巻文政二年伊勢・美濃地震、第10巻天保元年京都地震、第33巻信州大地震1件、第44巻小田原箱根地震、第64,65巻大地震海嘯、第69,70巻江戸大地震である。他に別巻に仕立てられているのは10巻に及ぶ米船渡来と題される巻である(写真3)。

『鶏肋集』は、収録記事が寛政二年(1790)から始まるが、文化・文政期は少なく、天保期から徐々に増加、著者安井重遠が死去する文久二年(1862)までの政治・社会・世相記事が収録されて

いる。全 23 冊である。今回（2000 年 5 月）の調査で、安政の両度の災害については、それぞれ別本仕立ての「嘉永甲寅震濤録」、「東都地震録」とそれにつづいて安政三年（1856）八月二十五日の大風雨が東都大風雨としてまとめられ、名古屋市博物館に収蔵されていることが判明した（写真 4）。「鶏肋集」に安政元年東海、南海地震津浪と安政江戸地震の記事が見当たらないことを不思議に思っていたところ、年月の当該箇所に応じたような一条があった。

一、十一月四日朝同五日御国初諸国大地震津浪二付書冊或は風説書類数多二付 別巻ニいたし置

（「鶏肋集」16 冊、十一月四日条）

このことから、名古屋市博物館の安井家文書のうちにある上記二書（3 冊）は、収録記事の対象年代からして安井重遠の著作であることには間違いない。この二書を「鶏肋集」の別本としてよいかどうかは今後検討を要するとしても、ここではとりあえず「鶏肋集」の別本という位置づけをしておく。また、著者安井重遠は海防問題について、「夏那波那志」（げなはなし、蓬左文庫蔵）43 冊を別録としている。他に、「分福茶釜記」（名古屋市佐野肇氏蔵）がある。これは、天保十四年（1843）日光社参に際して、尾張藩主に供奉し重遠が茂林寺から入手した同寺縁起の摺物を貼り込んだもので、極初期の収集作品とみなしてよいと思われる。したがって、安井の政治・社会・世相を収録した編著は、今のところ、少なくとも上記の 4 件があることが明らかになった。これらすべてを検討して、はじめて著者の情報収集の姿勢を窺うことができるものとしなければならない。しかしながら、安井の場合、善光寺地震についてはきわめてわずかな記事しか収録していない。そこで、まず前記二書の内容を比較検討し、巷間に流布する災害情報とはどのようなものか、その一端を明らかにしたい。少なくとも、現在の幕末情報論においては必ずといってよいほどに言及されるこれら著名な三書が、この時期の大災害に関する情報を、ペリー来航にはじまる海防問題とともに別項、あるいは別本に仕立てられたこと自体がすでに災害情報のもたらした社会的意味の広がりを見せしめていると考えるからである。

では、次にこうした記録集に書き込まれ、或いは綴じ込まれた災害情報とはどのようなものであったのか、具体的に見ていくことにしたい。

（2）善光寺地震

ここでは、「藤岡屋日記」と「青窓紀聞」を比較しながら、災害情報の内容を検討する。

表 5 は、記事の内容を大まかに項目分けして、その件数を比較したものである。届書、達、見聞・報告などの分類項目は全体の傾向を推し量るために、記事の内容から推定した任意に設けた項目である。以下に各項について、「藤岡屋日記」と「青窓紀聞」を比較しつつ説明する。

届書：藩主または幕領の場合は代官が幕府に提出した地震被害の届書である。

たとえば、真田信濃守から「私在外信州松代表、一昨二

表 5 善光寺地震情報

分類項目	藤岡屋日記	青窓紀聞
届書	21	37
達	6	2
見聞・報告		9
風聞	4	4
戯詞	6	3
摺物写		3
摺物		1
著者控	1	5
絵図写	3	5
地震説	1	
合 計	42	69

十四日夜亥刻頃より大地震にて、城内住居向・櫓並垣等夥敷破損、家中屋敷・城下町、領分村々其外支配処潰家数多、⁽²⁰⁾」のような被害届である。これが21件もあるのは、善光寺地震では、虚空蔵山が山体崩落をし、犀川を堰き止めた後決壊して洪水となる二次災害が発生したため、幕府に対する被害届・達は何回も提出されたからである。たとえば、真田信濃守3回、代官高木清左衛門3回、川上金吾助2回などである。この他、代官から提出された救済金伺書などもこの項に入れた。

「青窓紀聞」の場合、37件と『藤岡屋日記』を遥かに上回る件数があるのは、真田信濃守の被害届は三月二十六日の震災直後から七月九日の最終的な領内全域の被害報告まで7回の届書を収録しているからである。高木清左衛門についても5回、越後高田で続いて起きた地震についても榊原式部大輔の届書4回を収録するなど、この方面の情報収集に『藤岡屋日記』より有利な立場にあったことを窺わせる。

達：幕府から大名あるいは幕府吏僚に対して発した命令などである。

たとえば、勘定所役人植村（村松の誤り）忠四郎らに対して、「越後国・信濃国村々地震二付、堤川除其外破損之場処見分、此度為御用罷越候二付、御暇、拝領被仰付候⁽²¹⁾」など被害調査のため、幕府の勘定所の役人を現地に派遣する幕令などである。他に、災害復旧のため、幕府から領地被災の大名に対して資金借用の許可を伝えるものなども含まれる。「青窓紀聞」の著者はこの方面の情報はあまり集めていない。

『藤岡屋日記』、「青窓紀聞」とも届書や達はほぼ同一の性格を持つものであるから、一括すると、それぞれ全体の件数の『藤岡屋日記』で64%、「青窓紀聞」で57%と記事の圧倒的多数を占めているのである。

見聞・報告：直接災害に遭遇した人などの話や、または被災状況を朋輩や知人に伝えているもの。

風聞：伝聞的要素の強いもの。

見聞・報告、風聞は似通った領域のもので、線引きがむずかしいが、とりあえずここでは、受け手にとって直接性があるか、全くの間接的話題なのかを基準とした。『藤岡屋日記』にのる風聞情報の4件は、いずれも江戸の横山町、深川永代寺門前、牛込榎木町、本郷春木町から善光寺開帳の参詣に行き、地震に遭って難をのがれた奇譚か、地震で圧死した人が事態を予見していた兆候についての話などである。これに対して、「青窓紀聞」の場合は、名古屋市中から善光寺参詣に赴いた人を題材としている。

名古屋にてハ

裏町新長屋質屋	大平屋といふ者一家内
桜の町桑名町東へ入	当主 米屋甚助
長者町延場	囲妾
袋町伏見町東へ入	畳屋仙蔵女房
片端坂下	刀売買 三河屋一家内

右等は全く打れ死焼死之よし

（「青窓紀聞」33下 信州大地震）

など、名古屋市中から参詣に出かけ災難にあった人たちの話が中心である。恐怖のあまり「大震

之節誰一人として口聞者無之由」のリアルな一条の書留は、著者水野正信がこれらのことを実際にごく身近な話として聞いていたことを想像させる。

こうしたものに対して、飯山では百姓が10人ほど生き残り、殿様も行方が知れないとか、越後高田では殿様が津浪にさらわれたといったことも書き留められているが、これらは風聞情報とした。

戯詞：『藤岡屋日記』に収録された戯詞には、安政江戸地震で爆発的に発行された鯀絵のモチーフが既に先行して現れている。地震押さえを託された鹿島大明神に対して、京都地震に続いて信州地震が起きるなど「手緩、不束二付、差控」を命ずるなど封廻状をもじった「風怪状」と題されるものがある。他に本来錦絵であったと推定される「地震拳」の詞書だけが書き留められているものや、地震口説節などである。「青窓紀聞」の収録する落し噺、一口咄などと同じものはみられない。こうしたものが江戸、名古屋で売られたかわら版に基づいているとすれば、それぞれの都市の趣向の違いを示すものとして興味深い。

絵図、摺物：『藤岡屋日記』には3点の絵図の写がある。原本は焼失し写本による翻刻版をみるだけでは著者由蔵自身の手になるものかどうかは判定しがたいが、いずれも犀川に山体崩落の土砂が流れ込み、水が流れなくなった様子の素描である。摺物からの転写が想定されるものもある。「青窓紀聞」の場合にはかわら版を1点綴じ込んでいるが、別にこれをそのまま描き写し、著者によって彩色が施され、さらに山や樹木が書き加えられたものが綴じられている（写真5）。摺物、及び摺物写としたのはそれぞれこれらを指している。また、「善光寺参詣之者見聞之趣写来候図」と題されるものも含まれる。実際に参詣した人から直接体験を聞いて書き留めたと推定される。

水野正信の年譜（中村前掲書）によれば、天保九年（1838）、彼は江戸御用勤めの間、善光寺に遊んでいる。弘化の地震が起きる約10年前である。この時の経験を踏まえて、何が起きたのか、地震による地変を理解しようと、努力していることが窺われる。また、「四月七日御出役御改図」と題された、犀川地変の素描もある。これは幕府から四月七日に派遣された勘定所役人の実地見聞報告に接した結果と推定される。重臣の用人という立場上得られる貴重な情報に接する立場にあったことがわかる。

地震説：『藤岡屋日記』にみられる地震年表等を含む地震由来書の写などであるが、「青窓紀聞」にはこうした地震解説書の写はみられなかった。

以上の比較を通して、『藤岡屋日記』と「青窓紀聞」の災害情報の特徴を、①災害情報の構成、②情報内容、③巷間の流布情報への姿勢の3点から比較すると、以下のようにまとめることができるだろう。

- ① 災害情報として書き留められたもののうちの大部分は、幕府へ提出された各大名の被害届、あるいは幕府が各大名に発した達書などであり、したがってその内容は共通している。
- ② 見聞情報は著者の生活空間に密着したところのものが書き留められており、それぞれの著者を取り巻く情報空間に一定の限界、あるいは範囲があることを示している。
- ③ 巷間に流布したかわら版などが収録情報全体のなかで占める割合は高くはないが、②と同様に、江戸と名古屋に共通して流布したものが少なく、この段階ではかわら版などの流通範囲が限られていることが推定される。

つぎに安政東海、南海地震津波の場合をみてみよう。

(3) 安政東海、南海地震津波

前項同様に『藤岡屋日記』と「青窓紀聞」それに「鶏肋集」別本の情報内容を比較する。

比較検討に入る前に、「青窓紀聞」と「鶏肋集」の関係について述べておきたい。「青窓紀聞」はすでに紹介したように、水野正信の随筆集として著名なものであるが、現在のところこの全貌を分析したものはないということである。また、「鶏肋集」についても同様、全容を解明したものがなく、また、「鶏肋集」の著者安井重遠については詳しい検討もなされていないということである。次節でこの安井についての多少の新事実を後述するつもりである。

「青窓紀聞」の大地震海嘯上(64巻)、同下(65巻)の構成をみておこう。64巻大地震海嘯上は、尾州大地震津浪と諸国諸説の上巻、65巻大地震海嘯下は、諸国地震津浪の下巻、魯西亜船駿河沈没のそれぞれ二つの小項から成る。当面、魯西亜船駿河沈没は除くことにする。64巻の尾州大地震津浪は、この地震による尾張藩各所の被害と著者水野正信の地震体験、見聞および「嘉永七年甲寅大地震尾州数日之記」と題される日記である。聞書その他諸国の被害に関する流布情報は主として、64巻諸国諸説の上巻と65巻諸国地震津浪の下巻に収められている。これらの記事の内、水野正信自身の日記などを除くと、かなりの部分が「鶏肋集」別本の記事と同一のものが多く、その数は「鶏肋集」別本146件のうち、87件に及んでいる。その大部分は各大名の被害届である。また、摺物では、美濃屋伊六板(名古屋小牧町)の「地震火脈万国図説」を二著ともに現物を綴じ込んでいる。こうした情報の重なりについては、一般的な流布情報と考えるより、水野と安井の交友関係をまず考えなければならない。このことについて、すでに「青窓紀聞」第104冊、文久元年(1861)十二月六日の条に、神谷三園、竹村通央、安井重遠、小寺玉晃などと「和漢外国の引用を助議する事年久し」ことが指摘され、水野周辺の同好会の存在が幾重にもあったらしいことが紹介されている。また、名古屋藩におけるこうした類の同好会の存在について、他所でも指摘されており、こうした存在を考慮に入れないと、流布情報の実態が明らかにならない。しかし、当面は災害情報というごく限られた側面での重層性を検討することに限定しておきたい。

表6によって、『藤岡屋日記』と「鶏肋集」別本の情報構成の概要を示す。「青窓紀聞」の尾州大地震の項は水野自身の体験記に基づく叙述であるためか、整理された記述でないものがあり、他書との比較のための件数算出が困難である。そこで、前二書との比較を中心に、「青窓紀聞」にも言及することにしたい。

ここでの分類項目は、前項と同様であるから、特に説明を要しない。

届書：『藤岡屋日記』では大名による被害届が110件にのぼる。「鶏肋集」別本でも71件と高い数値である。これは、この災害が日本列島の太平洋岸に沿って、九州から、

表6 『藤岡屋日記』、「鶏肋集」別本
安政元年地震津波

分類項目	藤岡屋日記	鶏肋集別本
届書	110	71
達	7	15
触	2	1
注進	13	17
見聞・報告	6	3
書状	5	13
風聞	6	3
地震説		7
戯詞	2	11
摺物		4
摺物写		1
不明	1	
合 計	151	146

表7 『藤岡屋日記』と『鶏肋集』別本 大名被害届の比較

項 目	出 典	①	②	③	④	⑤
榊原越中守届 (久能)	『藤岡屋日記』	11, 4	11, 9	11, 9	11, 28	
	『鶏肋集』		11, 5	11, 9	11, 23	
	『青窓紀聞』	11, 4	11, 5	11, 9	11, 23	
水野出羽守 (沼津藩)	『藤岡屋日記』	11, 6		11, 15	11月	12, 16
	『鶏肋集』	11, 4			11, 22	
	『青窓紀聞』	11, 4	11, 5	11, 16	11, 22	
松平伊豆守 (三河吉田藩)	『藤岡屋日記』	11, 10	11, 10			
	『鶏肋集』			12, 9	12, 9	
	『青窓紀聞』			12, 9	12, 9	
松平阿波守 (徳島藩)	『藤岡屋日記』	11, 16	11, 17	2, 5, 27	2, 5, 27	
	『鶏肋集』	11, 16	11, 17			
	『青窓紀聞』	11, 16	11, 17			
尾張藩	『藤岡屋日記』	12, 25(尾, 濃, 三州総高 49052 石損亡)				
	『鶏肋集』	城内御庭, 城院, 城下町々, 船蔵, 熱田の各損所				
	『青窓紀聞』	城内御庭, 城院, 城下町々, 船蔵, 熱田の各損所				

四国, 紀伊半島, 東海地方の広域に亘り, 津浪による甚大な被害をもたらしたため, 多数の藩の被害届が出されたからである。そしてさらには, 地震, 津波発生直後に被害が出たことをまず報告し, その後被害が明らかになるにつれ, 詳細な報告が提出されるという形で進行するから, 一大名について2, 3回の被害届が出される場合が多かった。このことを反映して, 『藤岡屋日記』の場合でいえば, 徳島藩松平阿波守領分の被害届は, 津波発生の国元からの知らせを江戸で受けた十一月十六日から翌二年五月二十七日の最終的報告まで5回に亘っている。以下, 『藤岡屋日記』に書き留められた被害届の多いものは, 久能山の榊原越中守, 駿州沼津藩水野出羽守の各4回, 豊後府内藩松平左衛門尉3回, 続いて2回の届が書き留められているものは, 遠州小島藩松平丹後守, 伊予今治藩松平駿河守, 三河吉田藩松平伊豆守, 三河岡崎藩本多中務大輔, 鳥羽藩稲垣撰津守, 遠州浜松藩井上河内守, 小田原藩大久保加賀守, 遠州掛川藩太田撰津守, 紀州藩など多数ある。遠州, 三河, 紀州, 四国の大名に被害届の頻度が多いことは, この地震の被害が集中した地域を示している。『鶏肋集』別本の届書は71例あるが, ここでも何回かの被害届のみられる大名が何例もある。榊原越中守の4回, 水野出羽守3回, 2回の届書が認められるのは, 松平伊豆守, 松平阿波守, 増山河内守, 京極佐渡守, 松平能登守などである。

このうち, 頻度の多い何例かを『藤岡屋日記』と照合すると, 表7のようになる。それぞれの被害届について簡単な説明を以下に摘記しておく。

1. 榊原越中守照成(交代寄合 1800 石, 駿河国河内郡久能山東照宮宮番)
 - ① 11 月 4 日; 久能山地震にて坊中倒壊, 出火の緊急届
 - ② 11 月 5 日(『藤岡屋日記』9 日); 領分久能陣屋津浪被害届
 - ③ 11 月 9 日; 久能山中地震被害詳細届
 - ④ 11 月 23 日(『藤岡屋日記』28 日); 領分久能陣屋など各所被害詳細届
2. 水野出羽守忠良(駿河国沼津藩 5 万石)
 - ① 11 月 4 日(『藤岡屋日記』6 日); 領分沼津宿, 城下各所被害届

- ② 11月5日；下田津浪被害につき，担当固場所異変届
- ③ 11月15日（『青窓紀聞』16日）；津浪にて遭難のロシア船警衛士引上げに付き
- ④ 11月22日（『藤岡屋日記』日付なし）；領分碧海郡大浜村などの被害届
- ⑤ 12月16日；三州大浜などの詳細被害届

3. 松平伊豆守信古（三河国吉田藩7万石）

- ① 11月10日；吉田城内，城下とも被害甚大につき，緊急届
- ② 11月10日；今切関所地震津浪にて潰れにつき，緊急届
- ③ 12月9日；吉田城内，城下とも被害甚大につき，詳細届
- ④ 12月9日；今切関所地震津浪にて潰れにつき，緊急届

4. 松平阿波守斎裕（阿波国徳島藩25万7千石余）

- ① 11月16日；領分阿波国稀なる地震にて被害につき，緊急報告
- ② 11月17日；早飛脚到着，津浪にて領分流死人出来，緊急届
- ③ 12月9日；阿波国被害損耗高8万6百余石，流失家屋，流死人など詳細届
- ④ 12月9日；淡路国被害損耗高2千余石，潰家その他詳細届

5. ① 12月25日；尾張藩領（尾・濃・三・信州）4万9千石余の水災・震災被害高

「鶏肋集」別本，「青窓紀聞」とも①の書上はなく，「下御庭之内損所」（御深井）の損所，「御城下寺院損所」，「熱田地内」，「在地内」，「御城下町々損所」，「御船蔵損所」，「熱田」の項目のもとに損所が列挙されている。それぞれに日付はなく，幕府への届出ではなく，藩内に留められた記録と推定される。

以上の結果をみる限り，大名の幕府への届出に限っていえば，江戸での幕府筋周辺に情報源をもつ『藤岡屋日記』と名古屋尾張藩の日記所に職をもち，入信する情報に直接触れていたであろう下級役人の情報には重なり合うものが少なくない。絶対量で若干の開きがあるのは，尾張藩に直接関係する情報が否かの選択が収集段階ですでになされていた可能性もあるから，必ずしも『藤岡屋日記』の方が情報収集において勝っていたと言い切ることはできないだろう。しかし，また，表7にみる限りにおいては，「鶏肋集」別本と「青窓紀聞」の情報の重なり合いは明確である。

達：『藤岡屋日記』では，「達」と分類したものは7件にすぎない。このうち，5件はこの災害で幕府に拝借金を許可された大名への達である。「鶏肋集」別本では，この類が15件ある。このうち，7件が拝借金関係である。他の記事は，3件が地震につき日光門跡，比叡山，増上寺，あるいは熱田神宮などへの安全祈禱の達，各大名への立退方，火の用心などの達類，被害検分御用派遣の達などである。「青窓紀聞」では，安政元年十一月六日～翌安政二年十月二十九日の間に幕府から拝借金を許された大名を列挙している。この年六月十四日の伊賀上野地震で被害を受けた藤堂家2万両，桑名松平家5千両など6名の拝借金高と，十一月四，五日の地震津浪で被害を受けた大名23名の拝借金高を書き付けている。個別記事は『藤岡屋日記』，「鶏肋集」別本にも散見するが，まとまって記されている例は「青窓紀聞」以外にはない。水野の情報源の豊富さを物語るものであろう。

注進：『藤岡屋日記』では13件，このうち，東海道宿の被害に関するもの6件，大坂における津浪遡上による被害など大坂御用達からのもの2件，甲府問屋からの市中被害2件，他に駿府城

内1件、西国筋被害全般についての情報1件などである。発信者は宿役人、三度飛脚問屋などである。大坂以西の情報が少ない点は「鶏肋集」別本、「青窓紀聞」と対照的である。

「鶏肋集」別本では注進17件を認めることが出来る。このうち、12件が「青窓紀聞」と同じものである。それらの内容は『藤岡屋日記』の場合と異なり、名古屋以西の情報が多い。名古屋藩御用飛脚の小島権兵衛によってもたらされる伊勢山田、紀州、広島、小倉などの被害概要、東海道各宿の被害、京都伝馬会所からの京都の状況、回船問屋あるいは伊豆石場預主による下田湊の被害などである。この地震による南海地域の被害は東海地域に限らず大きかったが、ここにみる江戸、名古屋間の情報収集に現れた地域差は、個人の情報収集による限界という以上に、当該地域の情報流通量、内容に基づく差の現れといえようか。

見聞・報告、風聞：『藤岡屋日記』では12件ある。このうち、下田の津浪被害および村垣与三郎ら外国応接の役人らの動向を含む情報5件、大坂の市中被害、江戸市中における南部藩屋敷の若干の被害各2件などである。「鶏肋集」別本で6件、このうち、3件が「青窓紀聞」と重なる。碧海郡大浜村、刈谷、熱田など名古屋周辺の被害見聞、下田、江戸市中など各地の被害見聞、風聞の書留であり、あまりまとまった内容ではない。ここでは、話題性のある情報を集めようとする姿勢を『藤岡屋日記』の場合に顕著に感じとることができる。

摺物・戯詞：まず、摺物についてである。『藤岡屋日記』には摺物の写はないと判断されるので、「鶏肋集」別本と「青窓紀聞」を検討する。「鶏肋集」別本には摺物4点、その写と判断されるものが1点ある。このうち、「青窓紀聞」と同じ摺物の本物が1点綴じこめられている。すでに紹介したように、美濃屋伊六板（名古屋小牧町）の「地震火脈万国図説」である。これはこの表題が示す通り、地震は世界中に通ずる地下の火脈によって起きるものであり、北アメリカ、南アメリカ、アジア、ヨーロッパ、アフリカの各大陸にその火脈が通じているとして、世界地図が描かれるものである。この火脈によって、地球上の五穀草木が生育すると説く。この説は、明治初期の地文学の教科書などでもよく説かれた地震・火山に関する見解であった。逸早く、当時の外国から輸入した地理書の翻訳から得られた知識が、このような地方出版で出回るという点では、二重の意味で珍しい摺物である。⁽²⁵⁾

他に「青窓紀聞」に「頃は嘉永七甲とら年十一月四日朝五ツ時頃…」とはじまるかわら版が綴じ込まれているが、この写しが「鶏肋集」別本にある。絵も写し取られている。また、当時震災の社会状況を皮肉ったり、茶化したりする戯詞のかわら版が発行された。それぞれ現物の所在を確かめてはいないが、明らかにかわら版から写し取られたと推定されるものが「鶏肋集」別本、「青窓紀聞」の二書に共通してみられる。「いたこぶし」、「大津絵節」、「地震御仕置風怪状」、「四日取組」、「厄払」などである。こうした面で相互に情報交換がなされていたことは十分に考えられる。

地震説：「鶏肋集」別本に顕著な傾向で、地震原因についての著述五編を写し採ったものである。

①小島濤山の『地震考』（文政十三年）、②高野長英訳述「泰西地震之説」、③『和漢三才図会』地震の項の書抜、④「大地震ヲ前方ニ知ル法也」、⑤地震説の五編である。①と③は地震は陰陽の気が地中において調和が破れた時に発生するという旧来の説であるが、④は佐久間象山の磁石による地震検知器で著名な理論であり、②、④は地震について原因、証例、発明、擬製の

四項にわたって当時のヨーロッパの学説を紹介するものである。「ボイス」という蘭書からの翻訳であると断書がある。天保元年(1830)8月訳された。地震の原因について「夫土地ノ震動スル理ヲ推明ラムルニ其原火山ノ湧出ルニ異ナル事ナク其理モ亦相齊シ」として、地中の火が原因とする説である。証例、発明で紹介されているのは、イタリアのエトナ火山、1753年のリスボン地震が世界各地にどのように波及したのかに論究して、火脈が世界を廻っていることを指摘している。その他、1700年代に世界で発生した地震の紹介、擬製の項では鉄屑と硫黄各2貫目を混ぜて行う地震の実験方法を述べている。これらの最後に先に摺物として紹介した「地震火脈万国図説」とわが国の地震年表一覧の摺物が綴じられている。東西を問わず、地震理論の紹介を成した点は、「青窓紀聞」にはみられない「鶏肋集」別本の特徴である。年々の風説の書留である「鶏肋集」に収めずに、一つの体系だった著作とするために、別本仕立てとした著者重遠の意図はこれらの地震説の収録によって明らかになったとしてよいだろう。

以上によって、安政東海、南海地震津浪の災害情報については、先に善光寺地震の災害情報を検討した際にまとめとした3点、すなわち①災害情報風説留における大名の被害届や幕府の達類などの公的文書の占める割合が多い、②見聞情報の収集は情報収集者の住む地域性が反映する、③かわら版などの災害情報が全体に占める割合は高くはない、しかも全国的に流布する情報は稀であり、一定の流通範囲が想定されるという先の3点に加えて、④情報を交換、あるいは共有しあう仲間の存在によって風説留の内容は充実する。また、収集者の固有の関心に基づく情報の収集によって、他所からの情報を収集したものとはいえ、著作の構成は収集者個人の主張が反映されたものと位置づけられるといえよう。

(4) 安政江戸地震

江戸地震の情報は、それぞれ三書が別本に仕立ていることはすでに述べた。このことはそれだけ江戸地震の流布情報が多かったことの証明でもある。『藤岡屋日記』についてはすでにその概要は紹介しており、そこに収集された記録の信憑性についても別の場所で検討済みである。それらの結果の一部をここに必要な限りで述べれば、以下のようである。

- ① 『藤岡屋日記』の「江戸大地震」上・下(別本『藤岡屋日記』と称される)は、著者自身の地震体験をまず記し、次いで地震被害、見聞、風聞などの情報を江戸の各地域ごとに分け、編集し直したものである。
- ② このうち、各大名の江戸藩邸の被害届は91件収録されているが、これらの情報を各大名自ら届け出た第1次的な藩政史料と照合した結果概して正確である。
- ③ 市中の震災後の社会状況を風聞、見聞としてよく拾っており、著者由蔵の狂歌など添え、著者の社会時評を記している。⁽²⁶⁾

以上によって、すでに検討したところであるので、ここでは「鶏肋集」別本と「青窓紀聞」の江戸地震に関する情報収集を比較し、必要なかぎりでは『藤岡屋日記』にも言及することにしたい。表8は、「鶏肋集」別本の「東都地震録」の構成を捉えるために項目別に記事を分けたものである。

届書：15件の内容は、市谷にある尾張藩邸の幕府への被害届、紀州藩、水戸藩の江戸藩邸、寺社奉行松平豊前守、京都所司代脇坂淡路守の他、徳島藩松平阿波守の江戸藩邸被害の書上など

詳細なものが多い。『藤岡屋日記』などに比べ、藩邸被害の届書の収録は少ない。

達：江戸地震の災害情報を特徴付けるのは、126 江戸藩邸が何らかの被害を受けたことである。多くの藩邸が類焼した。当然、死者も出た。藩邸内の死者の処置について幕府が指示した文書はみられなかったが、藩邸焼失あるいは倒壊などのため老中、若年寄、寺社奉行らが中屋敷などに仮住まいする場合の告知、藩邸の修復、普請、幕府の支援貸与、あるいは通常の儀礼の一時的停止など、災害直後は数多い達が幕府から発せられた。また、被害を受けた町々に対しても集中的に町触が出された。こうした事実を反映して、達類が全体で 48 件におよんでいる。まず、これまで見てきた 2 件の災害と同様幕府が各大名に対して無利息、10 カ年賦で返済する拝借金が許されたケース 9 件、あるいは 1 万石以下、100 石以上の幕臣に対する屋敷被害の場合の拝借金、100 俵以下の幕臣に対する支給金に関する達などもある。幕臣に対するこれらの支援金の概算を 9 万 1677 両と打ち出している記事もみられる。これは、達ではないので、その他の項にいたしたが、この記事は『藤岡屋日記』にはみられない。尾張藩という情報源から図らずも得られた幕府中枢の地震対応策の一環であろう。

注進：飛脚問屋からの東海道神奈川宿本陣の被害、同じく青木町本陣被害、三度飛脚会所小島権兵衛による江戸の被害状況などである。安政元年の地震津浪で東海道が寸断された時に比べれば、飛脚問屋、その他による注進は圧倒的に少ない。こうした注進も内容から判断して、尾張藩の役所宛に届いたものであって、民間で流布したというものではなさそうである。

見聞・報告、風聞：江戸城石垣曲輪の崩壊の様子、市中の各所の被害、吉原の惨状、五街道の被害状況、奉公人の在所への避難、仮宅営業開始、松坂屋の営業開始など多様である。これらを合わせると、14 件ある。

摺物、摺物写、戯詞：摺物は小島権兵衛、貝島権左衛門ら飛脚問屋の江戸地震を報ずる木活字版摺物、口説節、新吉原細見仮宅場所付、流行一口文句なぞなどといった道化ものを含む 11 点、江戸地震の被害を伝えるかわら版の他、地震拳、地震大津絵節、三六歌仙など、やくはらひ、自身（＝地震）妙法など、かわら版を写したと推定されるもの 19 点を総計すると、30 点になる。この件数は達類などに次いで多い。『藤岡屋日記』の場合には、著者が創作したと考えられるものもあるから、こうしたものの惣点数を算定することはむずかしいが、「鶏肋集」別本の場合は摺物そのものを綴じ込んだもの以外も、ほとんどが既存の摺物を写したと考えられる。前項 2 件の災害の場合に比べ、これら摺物つまり、かわら版類が多くを占めていることは、江戸地震の際に実際にそれまでにない規模でこうしたものが出版されたことを物語る。

地震記：これらは、日本紀略、太平記、平家物語など物語類から、地震の様子を描いたものを書き抜いたもの 9 点である。

「嘉永甲寅震濤録」において、地震説を内外から集めたものに対応して、江戸地震の地震記では、物語に描かれた地震の様子を集めているのである。「鶏肋集」別本の場合は、単なる情

表 8 「鶏肋集」別本

分類項目	件数
届書	15
達	48
注進	4
書状	3
その他	1
触	2
風聞	4
見聞・報告	10
漢詩	4
摺物	11
摺物写	19
地震記	9
合 計	130

報の書留ということではなく、著者にはこれら地震の記録を一つの体系立った著作にしようという意図が明確にあったことがこの点からも確認できる。ここに、「鶏肋集」の著者をして情報収集をより完成度の高いものに編集しようとする姿勢を窺うことができる。

(5) 災害録の著者 その2 安井重遠

「鶏肋集」の著者安井重遠についてこれまでまとめた記録は見られない。その著作についても、現在知られている「鶏肋集」の他、「夏那波那志」以外明らかにされていない。今回の多少の調査で判明したことを列挙しておこう。

すでに紹介したように著作は上記二書に加え、「嘉永甲寅震濤録」、「東都地震録」の他、「分福茶釜記」の所在も明らかになり、今後まだ新しい発見もあり得ると思われる。ここで、安井自身がこうした著作をものする環境について示唆的であると思われることを名古屋市博物館蔵安井家文書から推定できる範囲で述べておく。

名古屋市博物館『館蔵品目録』第3分冊文献編⁽²⁷⁾には、安井家旧蔵書江戸中～後期60点が挙げられている。これらの殆どが重遠の父重昌⁽²⁸⁾、あるいは重遠自身の手になる写本と推定される。しかし、なかに「青窓紀聞」著者水野正信の手になる本多利明「河道」写本、「松濤棹筆」⁽²⁹⁾の著者奥村得義の手になる「五箇庄略記」写本なども含まれている。これら写本の存在からしてすでに安井重遠周辺の交友関係が類推されるところであるが、蔵書は、右筆の役目柄必要な手引書「諸大名伊呂波寄」、「夫路銀請御扶持方究」、「規定帳」、自家の勤仕に関する覚え書きなどの他、比較的大部のものには赤穂浪士論の「精忠技士実録」12冊、諸処の著作の抄録「天柱雑録」4冊などがある。このうち、ここで注目しておきたいのは、「大道寺玄蕃殿家来 水野三四郎蔵書目録稿写」なるものがあり、「天柱雑録」4冊に収録された全57編の写しのうち、23編が水野正信の蔵書目録に含まれるものと一致する。それらは「海防説略」、「羽倉某海防策」、「毀蘭説」、「戊戌夢物語」、「佐久間修理上書」、「海防余儀」など、当時論議的であった海防問題に関するものが目立つ。これは、先述した水野正信が「青窓紀聞」第104冊、文久元年（1861）十二月六日の条に、神谷三園、竹村通央、安井重遠、小寺玉晃、などと「和漢外国の引用を助議する事年久し」と記した事実まさに呼応する。すでに多くの先学が指摘されているように、当時話題の問題に関して、関連の著述を回し読みするような同好の士のネットワークの上にこうした情報収集活動が成立していたことは明らかであろう。被災地を遠く離れた地域にあっては、ネットワークのなかにあってこそ手にすることができた情報だからである。そのことを傍証する事実として、弘化四年の善光寺地震について、彼は「鶏肋集」別本をものしなかったという点を挙げることができるのではないか。「鶏肋集」がその序文にいうように、嘉永二年（1849）に著作としての体裁が整えられ始めたとするなら、彼のこうしたグループへの接近を少なくとも弘化四年以降に想定することもできるからである。

さて、では、海防問題あるいは一般的な風説留と災害情報とではなにが異なるのかという点については、次の項で考察し、本論のまとめとしよう。

まとめ——災害情報から「風説留」へ

以上において論じてきたことをまとめる。1章において提示した災害史料のカテゴリーを次の四に分け、A：藩政史料、B：村落行政史料（前掲拙稿では村落行政に携わる指導層による記録をBカテゴリーとしたが、ここでは村落行政史料に関わるものに限定し、個人的な記録はCのカテゴリーに入れた）、C：個人的体験記、見聞記、D：出版業者による災害情報の四カテゴリーとした。2章「善光寺地震の災害記録」においては、1章で提起した史料のカテゴリーに沿って善光寺地震の災害記録集を分析した結果、被災地においてはAの藩政史料及びBの村落史料の史料が量においてC、Dの災害記録を凌駕することをみた。と同時に、被災地内の場合に比べ、被災地から遠のくほど災害の伝聞史料が増える傾向が認められた。Dのカテゴリーに属するかわら版、その他の災害情報が売り出されたことが善光寺地震の出版史上における特色とされてきたが、その典型的な事例を分析した結果、出版、販売に関わる思想啓蒙活動に携わるネットワークの存在が浮かび上がった。3章「災害情報の流布」において、被災地域外に流布する災害情報を検討するため、Cのカテゴリーに属する著名な随筆集から災害記録を抜き出し、それらの記事内容を比較検討した。その結果、情報の大半を占めるのは、Aのカテゴリーに属する藩政史料類からのリーク情報であることが判明した。Bの村落史料は地域内情報に留まるため情報は広く拡散する傾向は認められず、むしろかわら版などの実物や、それらを筆写したものなどが収集されていることがわかった。また、都市においても、こうした情報を収集する同好の士のグループが存在したことも明らかになった。

書き留められた災害記録から窺われる、以上のような傾向を考える上で、参考となる分析として、ここでは高部淑子の『「人のうわさ」考——情報空間の展開⁽³⁰⁾』を挙げておきたい。高部氏が取り上げた「人のうわさ」なる記録は京都中京区木屋町通り四条上ル鍋屋町の田村家に伝わる文書で、安政五年（1858）から慶応四年（1868）までの11年間、850件以上の記事を収録する社会事件簿だという。しかし、記事の中心は、京都が幕末政治の中心舞台となる文久・元治年間に集中する。それらの記事を分析の結果として、極めて興味深い事実が指摘されている。以下に結論の一部をそのまま引用しておく。

一般に近世後期、特に幕末期になると、狂歌・ちょぼくれなどの落書が大量に市中に流布していたことが指摘される。しかし、以上見てきたことから、支配者間で交わされた政治向きの公的文書も多く流布していたことがわかる。そして、民衆は落書よりむしろ公的文書を注意深く写し取っていたことがわかるのである。（同上書 673 頁）

以上の指摘は、これまで分析してきた災害情報にもよく当てはまる。

また、高部氏は、「人のうわさ」には、個人の感想などは述べられていないことも指摘している。この点もCのカテゴリー全般的に該当する。

では、なぜ、支配者間で交わされた公的文書に人々が執着したのだろうか。恐らく、当時においても一般的には得難い情報として見なされていたからではないだろうか。ありふれた情報ではなかったからこそ人々が希少価値のある情報と位置づけ、積極的に求めたのであろう。この点では、災害情報は風説留の中心をなす海外情報とは違い、江戸時代の情報統制下でも規制が弱く、むしろ幕

府は民間で災害情報の流布を認めていた節のあることが指摘されている（今田前掲書）。こうした点を踏まえれば、災害情報が民間における風説留の活況に道を拓く先駆けを成したと捉えても過大な評価とはいえないだろう。しかもそうした事態は、幕末の巨大災害が頻発する安政期に近づくに従い、徐々に高まったのである。その初発に位置する善光寺地震の災害情報は単なる災害情報の活況の先駆けを成したというに留まらず、こうした近世情報構造の転換を画するイベントと見なすべき要素を持っているといえるのである。

具体的には、被災地域、被災外の地域においても、善光寺地震の情報を廻るネットワークは形成の途上であったことが、上記の分析から判明した。すなわち、原昌言の災害絵図出版事業の着手、その経験を活かした更なる事業の展開と地域を超えた交友関係の拡大、はたまた、都市における政治・思想的話題を論ずる文化サロン・メンバーの情報交換と交友の緊密化などである。風説留の活況に至る情報構造の転換の社会的内実として、その先駆けとなる災害情報の側面から、情報をめぐる人間関係のネットワークの存在、発展を具体的に検証したことによって、従来幕末情報論のなかに位置づけられて来なかった災害情報の位相をここに示すことができたのではないかと考える。

しかし、もちろん、災害情報は海防問題の風説留流布の露払いとしての意味だけに終わるものではない。ここでは災害記録の情報としての側面に注目し、その発信主体の事例と受容層として被災地を遠く離れた知識人グループの災害の書留記録に焦点を当てた分析結果に留まるものである。

謝意

本論を成すにあたり、阪口泰子氏（名古屋市蓬左文庫）、種田祐司氏（名古屋市博物館）、寺島隆史氏（上田市立博物館）、原與氏、宮地正人氏（国立歴史民俗博物館館長）に資料について、ご助言、ご助力をいただきました。記して感謝申し上げます。

註

- (1)——「国立歴史民俗博物館研究報告」第81集、1999年、57-100頁
- (2)——『摺物総合編年目録』（稿）東京大学史料編纂所画像解析センター、1998年
- 『風説留中画像資料一覧』東京大学史料編纂所画像解析センター、1999年
- (3)——『幕末維新期の社会的政治史研究』岩波書店、1999年
- (4)——拙稿「災害とかわら版」『ニュースの誕生』東京大学総合研究博物館、1999年
- 拙稿「江戸時代のメディア」成城大学『民俗学研究所紀要』25号、2001年
- (5)——東京大学地震研究所、1988年
- (6)——文部省震災予防評議会編、1941年、復刻、鳴鳳社、1976年
- (7)——樹沢龍吉『叙事民謡善光寺大地震』銀河書房、1976年
- 拙稿「善光寺地震の災害情報」『善光寺地震—松代藩の被害と対応』長野市教育委員会・松代藩文化施設管理事務所、1998年、8-14頁
- 降幡浩樹「善光寺地震の絵図型瓦版について」『歴史地震』16号、2000年、11-22頁
- (8)——今田洋三「江戸の災害情報」『江戸町人の研究』第5巻、171-281頁、吉川弘文館
- (9)——東京大学社会情報研究所蔵小野コレクション、真田宝物館の善光寺地震に関するかわら版で確認できる。
- (10)——前掲降幡論文
- (11)——拙稿「善光寺地震の災害情報」『善光寺地震—松代藩の被害と対応』長野市教育委員会、1998；前掲拙稿「災害絵図研究試論」『国立歴史民俗博物館研究報告』第81集、1999年
- (12)——以下の2.3、2.4については、第17回歴史地震研究会におけるシンポジウムにパネリストとして参加した際のレジメに基づいている（『第17回歴史地震研

究発表会講演要旨集』2000年9月, 99-102頁)。

(13)——藤沢直枝『上田市史』下巻人物誌, 信濃毎日新聞社, 1940年, 1218頁

(14)——上田市博物館主任学芸員寺島氏にこの一連の史料をご教示いただいた。また, 同氏解説による原昌言・成沢寛経の往復書簡を参照させていただいた。記して感謝する。

(15)——上田市立博物館『上田藩の人物と文化』1986年, 71-73頁

(16)——吉原健一郎『江戸の情報屋』NHKブックス, 1976, なお、『藤岡屋日記』の善光寺地震記録は、『藤岡屋日記』第3巻, 137-155頁(三一書房, 1988年)にあった。

(17)——中村保夫「水野三四郎正信について」『郷土文化』15巻3号, 1960年

蓬左文庫『蓬左』42号掲載の年譜, 1997年7月

(18)——名古屋市蓬左文庫蔵『藩士名寄』安井清太郎の項

(19)——東京大学史料編纂所所報(24号)採訪調査報告, 98-104頁

(20)——鈴木棠三編『藤岡屋日記』第19巻弘化4年, 143頁, 三一書房, 1988年

(21)——鈴木棠三編『藤岡屋日記』第19巻弘化4年, 148頁, 三一書房, 1988年

(22)——『藤岡屋日記』第6巻, 56-91頁(三一書房, 1989年)によった。

(23)——宮地正人『幕末維新期の社会史的政治史研究』

岩波書店, 128頁, 1999年

(24)——『新修名古屋市史』第4巻, 第8章第1節情報文化の展開2, 660-668頁

(25)——拙著『磐梯山噴火』吉川弘文館, 1988年

(26)——拙著『安政大地震と民衆』(三一書房, 1983年), 講談社学術文庫『地震の社会史』と改題して収録, 2000年

拙稿「別本『藤岡屋日記』の地震災害情報」(『藤岡屋日記』編集のしおり, 13号)三一書房, 1994年1月

(27)——1997年, 73-74頁

(28)——寛政八年十月安井弥兵衛良明の婿養子入, 同九年十月御側大寄合支配, 寛政十年十月徒目付並, 文化十年右筆, 高100俵, 文政元年八月120俵となる(「藩士名寄」), なお, 重遠は重昌の実子であるが生年不明。ただし, 重昌が高120俵に昇進した文政元年八月に右筆部屋留役見習に召し出され, 住居も三間広いところに移った(「勤仕功德記」)。

(29)——名古屋叢書3編, 第9, 第10巻

(30)——滝沢武雄編『中近世の史料と方法』東京堂出版, 664-698頁, 後に保谷徹編『幕末維新と情報』(幕末維新論集10, 吉川弘文館, 2001)に収録されている。なお, 上記論集には, 幕末海外情報, 民衆の情報世界, 風説留と政治情報の三項にわたるこれまでの主要論文が収録され, 研究動向を概ね把握できるよう配慮されている。しかしながら, 災害情報との関連において海外情報を位置付けた論文は収録されていない。

(東洋大学社会学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2000年11月30日受理, 2001年9月4日審査終了)

An Analysis of the Circulation of the Disaster Information of Zenkoji Earthquake (1847)

KITAHARA Itoko

The main purpose of this paper is to make clear the states of disaster information in the whole communication structure in the Edo period. Specifically, the case of Zenkoji Earthquake is discussed in order to see what kind of disaster information was circulated, and how people obtained it.

The disaster information in Japan at that time can be classified into four categories as stated in my own work "An Essay on the Disaster-Pictures from the late eighteenth century to the nineteenth in Japan" (1999). The four categories are: (A) the information among the governors, (B) the suffering reports offered by village officers to their governors, (C) the private records memorandum by individuals, such as diaries, (D) the documentaries of the disaster or broadsides to sell at stores or on street corners for the masses. Based on this classification, most of the information of the Zenkoji Earthquake fall into category A or B.

Private essays which apparently belong to category C consist of the disaster information copied from category A or B. We can find many similar information in various essays whose authors belonged to the network to intellectuals in cities or in local areas. As for the information in category D, it is the distinctive feature that the local publishers had been active, supported by the network among the local intellectuals.

We can hypothesize that the circulation of disaster information could help people to prepare for upcoming unusual events and also help the development of the network among those who would share the same interests. The "Black Ship Attacking" by Commodore Perry was a Landmarking political event whose information was circulated quite rapidly and widely in Japan. We argue that the communication structure in the Edo period had been already developed partly by the circulation of disaster information.

写真1 「弘化丁未春三月廿四日信州大地震山瀬川塞湛水之図」(真田宝物館蔵) 江戸日本橋山城屋佐兵衛, 信州善光寺大門町葛屋伴五郎, 上田海野町上野屋三郎助の相合版,「俟命館蔵不許翻刻」と記されているから, 版權は俟命館すなわち原昌言が所有していた。



写真2 「弘化丁未夏四月十三日信州犀川崩激六郡漂蕩之図」(真田宝物館蔵)

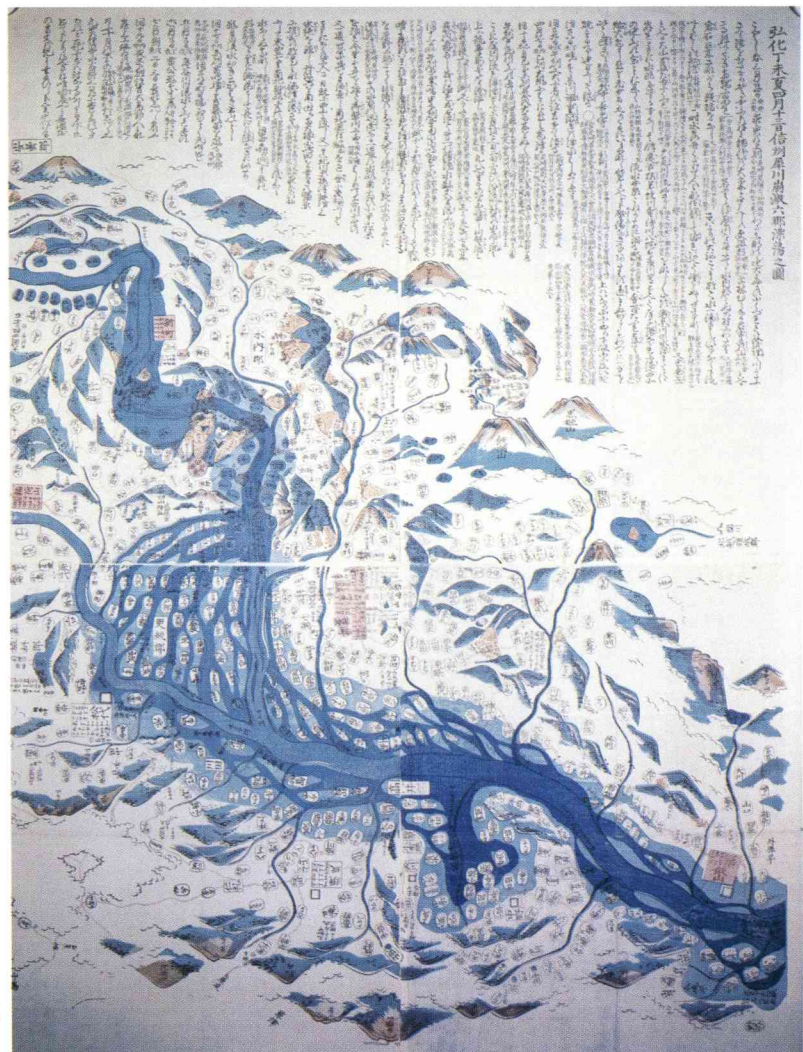




写真3 「青窓紀聞」(蓬左文庫蔵)の災害情報書留の各巻



写真4 安井家文書「嘉永甲寅震瀟録」「東都地震録」「東都大風雨」の各冊(名古屋市博物館蔵)

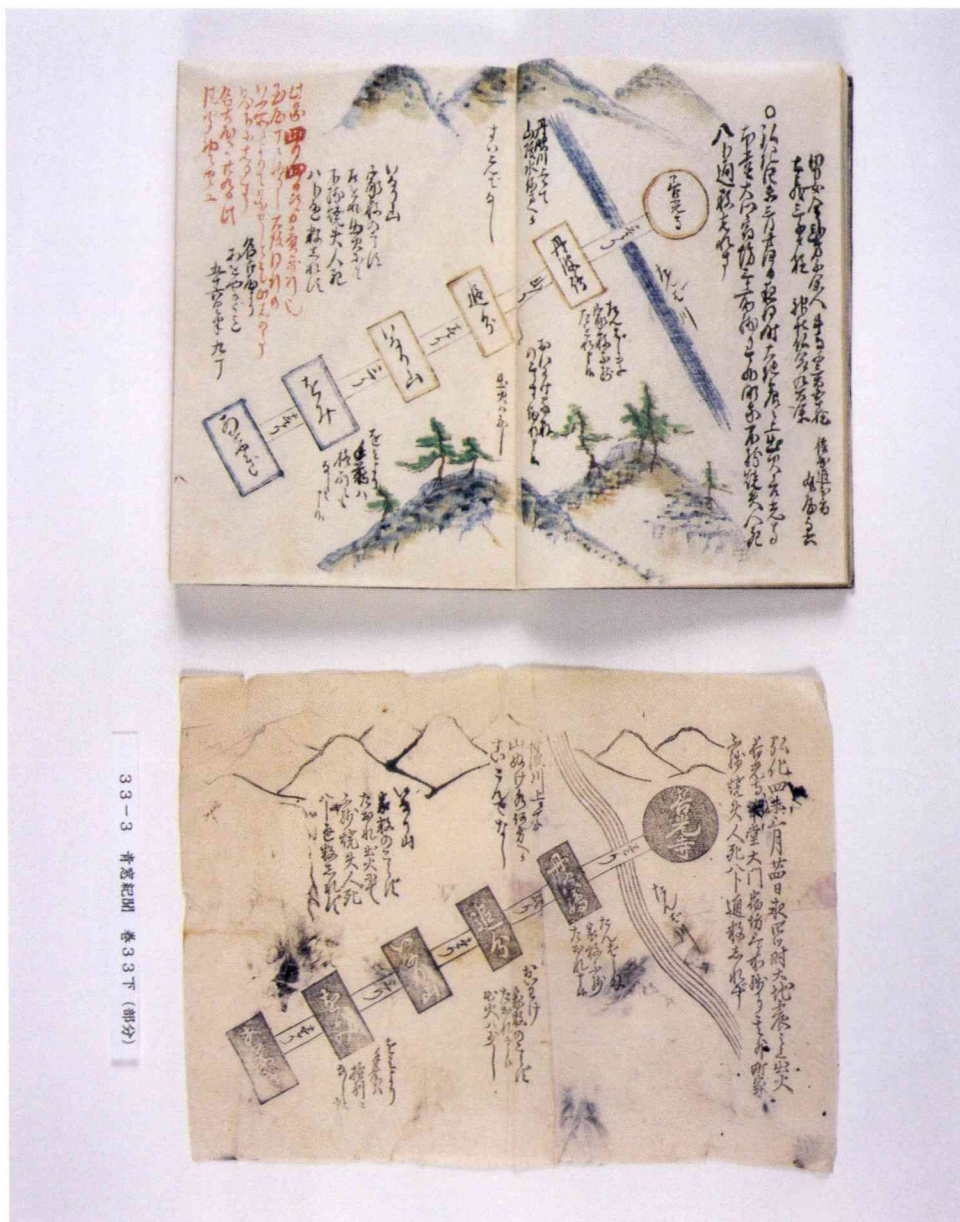


写真5 「青窓紀聞」第33巻信州大地震に貼込まれたかわら版(下)と著者水野正信によって写し彩色された部分(上)